

## 第5回 学校運営協議会 記録

日時	令和8年3月16日(月)	会場	美香保中学校 2階多目的室
司会	山本(美香保中学校 教頭)	記録	澤本(美香保中学校 主幹教諭)
出席者	伊達、高屋敷、橋本、棚瀬、小山、守本、水口、齋藤、大坂、森野、渡部、杉本、渋谷江北、渋谷一		
欠席者	藤原、和泉、富樫		

### 【1】会長挨拶(会長欠席のため割愛)

### 【2】令和7年度の総括と令和8年度に向けて

#### (1) 令和7年度の総括(伊達委員より)

- 活動実績の報告
  - ・ 今年度は計5回の学校運営協議会を開催した。
  - ・ 第1回は基本方針の承認、第2回は防災教育の研修など、初期は承認案件が中心だった。
  - ・ 第3回の「みかほっ子サミット」で子どもの声を直接聞いたことで、熟議が活性化した。
  - ・ 文部科学省の「教育課程柔軟化サキドリ研究校事業」の指定を受け、次年度からの新たな教育課程の挑戦が決定した。
- 次年度(令和8年度)への課題と展望
  - ・ 各取組のバージョンアップを図る。
  - ・ 熟議のテーマを焦点化し、具体化を深める。
  - ・ 防災教育をパートナー校全体で広げる可能性を模索する。
  - ・ サキドリ事業の活用について、児童生徒・保護者への説明を両立させる。
  - ・ 中学生が小学生の意見を吸い上げ、交流会のプランを子どもたちが自ら考える仕組みを検討中。最終的には中学校における生徒総会で交流内容を決定するなど、自治的な活動を促す。

#### (2) 令和8年度の小中一貫した教育グランドデザインについて(澤本主幹教諭より)

- 目指す子どもの姿
  - ・ 今回新たに、パートナー校3校が目指す子どもの姿を設定した。
  - ・ 目指す子どもの姿:「自分のよさ」と「友達のよさ」を認め合える みかほっ子
  - ・ 教育の柱: サキドリ事業を活用した「本物の経験」を通して
  - ・ 今回、パートナー校3校でサキドリ事業を行うが、3校ともサキドリで生み出した時間を特別活動に充てたいと考えている。
  - ・ 特別活動の中で子どもたちが「本物の経験」を味わうことで、社会に出た時に役立つ「非認知能力」を育むことを重視している。
  - ・ 本物の経験とは、「何のためにこの活動をするのか」といった目的意識をもつ場や、自己決定する場、直接体験する場、対話する場、失敗から学ぶ場などのことをいう。
- 組織体制(3つの部会)
  - ・ 従来の「学ぶ力」「健やかな体」「豊かな心」という区分を見直し、「課題探究的な学習」「自治的な活動」「学びの支援」の3部会を設置して小中の教員が協働で活動する。

- 具体的な4つの推進視点
  - ・ 9年間を通した子どもの学びのつながり：小中合同の「課題探究的な学習」の開発や、小学生が中学校を訪れる「みかほっ子交流会」などを実施する。
  - ・ 子どもの理解・生徒指導の連続性：誰一人取り残さない豊かな教育環境を小中で連携して構築する。
  - ・ 教職員の連携・協働：年3回の小中合同研修などを通じ、9年間の連続した学びを構築する。
  - ・ 家庭や地域との関わり：「みかほっ子応援団」の利活用や「みかほっ子語る会」、学校運営協議会、地域学校協働活動との連携を強化する。

### 【3】熟議 テーマ「ランドデザインの見直しと次年度の方向性について」

#### 〈Aグループ〉

- ・ 「目指す子どもの姿」への共感：新たに設定された「目指す子どもの姿」について、具体的な児童・生徒像をイメージしながら9年間のスパンで子どもを育てるという視点に、メンバー全員が共感した。
- ・ 「本物の体験」と6つのキーワード：施策の柱である「サキドリ」などを通じた「本物の経験」について、資料に示された6つのキーワードの妥当性を確認した。
- ・ 大学の授業での地域貢献や、小学校時代の地域・学年連携の事例を振り返り、これらのキーワードが実際に機能していることを再認識した。
- ・ 「対話」の重要性：協議の中で、体験の場を作るだけでなく、その中で「対話」をしていくことが最も重要であるという結論に至った。
- ・ 今後は令和8年度に向けて、小中学校が連携してこの「対話」を更に深めていくことが共通の認識となった。

#### 〈Bグループ〉

- ・ 事業の振り返りと議論の焦点：「先取り探究事業」とはどのようなものかという振り返りから始まり、そこから「本物の体験」の重要性について議論が深められた。
- ・ 「本物の体験」の定義：単に知識を与えるのではなく、「実際にやってみて、そこでつまずく」という経験そのものを指すのではないか。
- ・ 具体的な事例（切符の購入）：切符の買い方がわからない子が、実際に券売機でお金を入れて札幌駅までの料金を確認するなど、自ら試行錯誤して解決する過程が例として挙げられるのではないか。
- ・ 今後の方向性：大人が答えを与えるのではなく、子どもたちが自ら課題を解決できるような「場」を積極的に用意していくことを目指してはどうか。

#### 〈Cグループ〉

- ・ 「らしさ」の追求：良さを見つけるだけでなく、その人の「らしさ」についても考えていきたい。
- ・ 子どもとのゴール共有：大人が決めたテーマやゴールを押し付けるのではなく、子どもと一緒にゴールを見つけ、共有していく姿勢が大切である。
- ・ 振り返りの重要性：イベントなどの取組をやりっぱなしにせず、終わった後の「振り返り」の時間を大切にしたい。
- ・ 相互承認の場の形成：振り返りの場面で、自分や他人の良かった点や改善点を話し合うことで、お互いを認め合えるような「相互承認」の場を作れるのではないか。

### 【4】分科会～各校で学校関係者評価を実施

## 【5】副会長挨拶（渋谷副会長より）

- 活動の成果と学び
  - ・ 地域連携と熟議の習得： 2年間の関わりを通じ、地域連携や共同のあり方、そして「熟議」の具体について深く学ぶことができた。
  - ・ 全校道德の衝撃：2025年12月11日に実施された、中学校における「全校ごちゃまぜ道德」が特に印象に残っており、学年の枠を超えた20以上のグループで生徒たちが対話を重ねる姿に強い感銘を受けた。
- 今後の展望と提案
  - ・ 9年間の学びの接続： 義務教育学校のように9年間で子どもの育ちを支える視点を持ち、今回示された「子どもの姿」「重点」「評価」の3点セットを更に深めていくことが重要である。
  - ・ 教員の対話スキルの向上： 場と時間が整った次のステップとして、子どもとの対話を促進し、得られた情報を共有・活用するための教員の「関わり方のスキル」向上がポイントになる。
  - ・ 地域・保護者への広がり： これらの対話や関わりの質を高める取組は、教員だけでなく保護者や地域、そして子ども自身にもつながっていくものである。